

第一部 美川村の歩み

第一篇 美川村の環境



ささゆり

第一章 自然

第一節 区域・位置・面積……………三

第二節 地勢・地質……………四

第三節 氣候……………六

第四節 生物……………七

一、動物……………七
二、植物……………九

第二章 人文

第一節 產業……………一〇

第二節 人口動態……………一〇

第一章 自然

第一節 区域・位置・面積

愛媛県の地図を見ると、東の川之江市から南宇和郡の宿毛湾まで、ひじょうに海岸線の長いことが目につく。それはちようど扇を開いた形で、その扇のかなめの部分が、わが上浮穴郡にあたる。

上浮穴郡は四国山脈の西部で延々六〇許にわたって高知県と境を接する、県下でただ一つの海を持たない山郡である。したがって山は高く谷は深く刻まれ、集落はその谷川に沿わずかな平地と、それにつづいて傾斜する山腹に位置している。

行政的に久万町・小田町・面河村・美川村・柳谷村の二町三村に分けられているが、それは伊予灘に流れる肱川と、土佐湾に流れる仁淀川の二つの川の上流域に分れる。小田町を流れる小田川は大洲を経て肱川となり、石鏡山の

南麓に発する面河川は多くの支流を合せながら面河村から美川村を流れ、久万川を合せて流れ下って、柳谷村をすぎ高知県に入って仁淀川と名をかえる。

澄みきった面河川が貫流する美川村は上浮穴郡の東部に位置し、北の面河村、南の柳谷村とともに村の東側を高知県と境しており、西は久万町、南西にわずかに小田町と境を接する外は、愛媛県内の他郡と境を持たない。

村の位置を正確に経度・緯度で示せば、

東端 東経一三三度二分四六秒 高知県境、ヨラキレの東

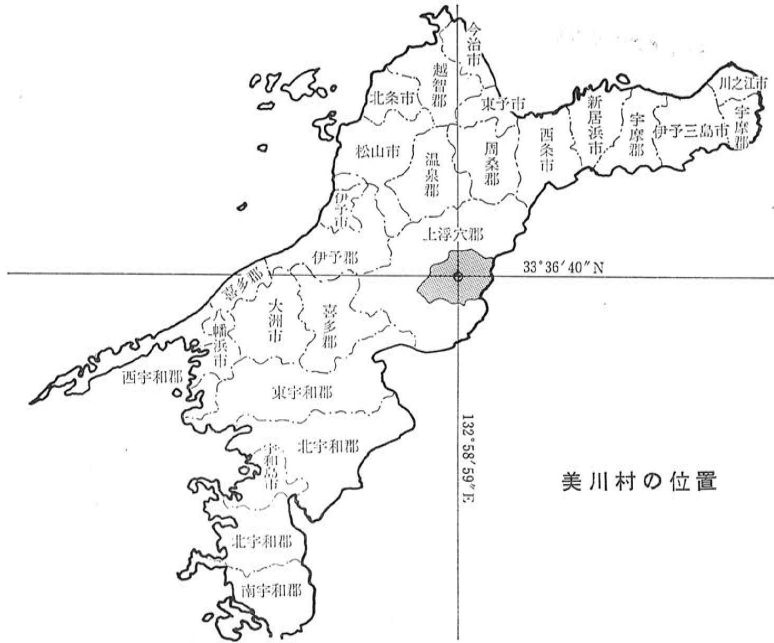
西端 東経一三三度五六分〇八秒 小田町境、狼城山西

北

南端 北緯三三度三三分一二秒 柳谷村境、栄重の南

北端 北緯三三度九分一二秒 面河村境、横山の北

また、役場は東経一三三度五八分五九秒、北緯三三度三六分四〇秒で、ほぼ村の中央に位置し、国道三三号線と県道西条久万線の分岐点であり、面河川と久万川の合流する地点でもある。景勝面河溪への入口にふさわしい石灰岩の御三戸嶽が役場の対岸に清流をめぐらせて屹立し、松の



美川村の位置

緑、秋の紅葉と四時の眺めが美しい。

村の東西約一五〇、南北約一二〇、面積一三五・〇二平方キを占める山村である。

第二節 地 勢・地 質

四国山脈は四国の島の中央を東西に貫いていて、一八〇〇呎を越す高山が、所々に聳えている。中でも徳島県の剣山（一九五五呎）と愛媛県の石鎚山（一九八二呎）は東西の雄で、石鎚山は関西一の高山である。大きな川は縦谷となつて山脈に平行して東西に流れ、あるいは山脈を南北に横切つて横谷を作り、急流飛瀑をなして流れている。

その四国山脈は石鎚山から西と南西に主脈を分けて走る。上浮穴郡はこの二つの主脈の間に挟まれた平均七〇〇〜八〇〇呎の山地である。西に向うものは三坂峠から中山への方向をとり、しだいに低山性となつて佐田岬半島に終る。南西に向うものは愛媛・高知の県境から上浮穴郡南部に一五〇〇呎を越える高峻ないくつかの山を連ねて、東宇和郡につづいている。

美川村は高知県境の山脈から西に支脈をのぼした三光ノ

辻山（一二一五・八呎）から四辻ノ森（一二〇一・五呎）の稜線で北の面河村と境し、東を高知県と山脈で境している。この山脈中で中津山（一五四〇・五呎）は明神山とも呼ばれて最も高い。この山の西の山裾を北から南へ面河川が流れているが、この河谷を距てて西南に大川嶺（一五二五・五呎）が聳えており、この二山を結ぶ線が美川村と南に隣る柳谷村との村境となっている。大川嶺の南には笠取山（一五六二・四呎）から雨霧山（一二四五・八呎）、つづいて小田深山、大野ヶ原など上浮穴郡南部の高山地帯を形成している。

大川嶺から西の狼ヶ城山（一三八一・五呎）を結ぶ線が美川村と小田町との境界となり、その稜線づたいに久万町との境が北にのび、やがて久万川を渡り、なお北から伸びた稜線づたいに久万町と境いせられ、これはやがて東北に方向をとって四辻ノ森からのびた面河村との境に連なる。

美川村はそのように北と東と南を一二〇〇呎を越える山脈にふちどられ、西の久万町との境は七〇〇〜八〇〇呎の稜線となっている。美川村のだいたい八〇〇呎以下の山地は面河川の主流と支流が縦横に刻んで流れている。久万川

の主な支流としては有枝川・大川があり、面河川には東川・直瀬川・久万川・黒藤川が流れ込んでいる。これらの支流は各所で名もない多くの支流を合せ、屈曲して流れ去り、わずかな平地があれば集落と水田を作り、傾斜地は畑・山畑とし、山地は緑一色の見事な植林で覆われている。

美川村の地質は西南日本を縦断する中央構造線が北四国を東西に走る南側（西南日本外帯）にあたり、いろいろな時代の地層が帯状にならび、あるいは交錯して、日本でもめずらしい地質の見本のような複雑な様相を呈しているが、大川嶺の峯つづきの地芳峠（一〇八四呎）で約二億年の昔、古生代の海にすんでいたポウマイ虫の化石がとれることなどから、当時は海の底にあったものと思われる。其の後の火山活動による地殻の変動で一億年以上も前に陸地になり、さらにたび重なる地殻の変動によっていろいろな地層がいくくんであるが、ほとんどは秩父古生層に属し、結晶片岩類の上に四千万年前の久万層群、千数百万年前火山からふきだした石鎚層群という火山の噴出物による地層からできている。面河川や久万川の流域は三回の間氷期に氷河にけずられて、大体三段の段丘からできており、集落

もこの段丘の上であり田畑として耕作しているところが多い。仕出ヶ岳洞や黒岩洞ができたのも水河によるものであると思われる。また御三戸嶽のような結晶片岩と石灰岩の断層もいたるところでみられる。

土壌は主として壤土および砂壤土であるが、結晶片岩類は風化しやすく、山くずれが多く、国道でも仁淀川沿いでは危険にさらされている所が多い。

岩屋山を中心として久万層群に属する礫岩帯があり、かつて石鎚山が火山活動をしていた頃、火口から流れてきた熔岩と、火口からふぎとばされた石ころが集まってできた集塊岩の層が何回か重なりあって美観を呈している。また大川嶺のような火山岩の山では、頂上付近は比較的なだらかで、カルスト地形をなしているが、おんじとよばれる土で植物の生育は悪く地すべりに似た現象をおこす。杉の植林や草地を利用しての牧牛、冬のスキー場としての利用など産業・観光・スポーツ面での活用につとめている。

第三節 気 候

上浮穴郡は四国山脈の中に位置するために高知のような

松山・美川・高知の気温と降水量

月 別		1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	全 年
松 山	気 温 °C	5.0	5.4	8.3	13.4	17.7	21.5	26.0	26.9	23.3	17.4	12.4	7.6	15.4
	降 水 量 mm	51	60	94	127	135	222	202	91	173	103	71	53	1381
美 川	気 温 °C	3.0	4.0	7.5	13.8	16.2	21.5	25.1	25.2	21.7	15.4	9.4	5.9	14.1
	降 水 量 mm	68	66	92	144	157	255	223	324	249	101	100	64	1850
高 知	気 温 °C	5.2	6.4	9.8	14.9	18.9	22.1	25.9	26.8	23.9	18.2	13.0	7.8	16.1
	降 水 量 mm	62	83	166	273	291	389	353	329	344	170	116	69	2645

注、美川は昭和30・46の2年間の平均(参考)

南海型の高温多雨な気候も、ここまでは達せず、また温暖寡雨の瀬戸内式気候にも遠い。上浮穴郡の中でも美川村は久万町や面河村から見るとかなり冬の気温が高く、同じ美川村でも黒藤川方面は東川・七鳥・有枝・大川などに比していくらか気温が高い。

夏はおおむね冷涼多雨、冬は寒気きびしく積雪が多い。年平均気温一四度Cくらい、一〇月二〇日に初霜を見、五月五日に晩霜を見るところ内陸高冷地型の特色をもつ。標高差による気温の

通減のほか、年較差・日較差が大きいこと、雨と雪の多いこと、日照時間の短いこと、霧が深いことなどが特色である。

天気予報も美川村には合わず、どちらかといえば松山よりも高知の方に近い。

第四節 生 物

一、動 物

野生動物 上黒岩遺跡から、人骨のほか、犬・シカ・イノシシ・タヌキ・サル・アナグマ・テン・ネズミ・モグラ・ヒキガエル・鳥類などの骨が多く発見され、一万年以上前からこの付近に、これらの動物が棲息していたことが考えられる。

また、七鳥・猿渡・猿遊・猿楽などの地名からも美川村は鳥獣の棲息地として適していることが考えられ、時にいのしや野うさぎが出て、畑作物や杉・松の若木を害することがあるが、植林によって棲息地がせめられ、飼料となる植物の減少と、ハンターの乱獲によって野生動物はだ

んだんすくなくなっている。野生動物の中で最も大きいのはいのしで、熊・鹿などは姿を消して久しい。たぬき・あなぐまも棲息しているが、夜行性で姿を見ることはまれである。樹上で生活するリスはだんだん数がふえているらしく、猿も御三戸付近まで稀に出てくることもある。むさび・ももんがなども寺社の森などに棲みついているらしいが、ほとんど姿を見ない。野うさぎは野ねずみと共に繁殖力が旺盛で杉・松の若木に大害をもたらすことがある。テン・イタチ・コウモリなど小動物は岩陰・洞穴・石垣の穴などに棲息している。

鳥 類 キジ・山鳥など植林の増加と共にだんだんすくなくなっているが、休猟区を設けたり放鳥などにより、キジ・コジュケイ・山鳩などがふえている。雀・もず・目白・しじゅうがら・かわらひわ・ほおじろなどはどこでもよく見かける。とりわけ春になると、早朝からのうぐいすの鳴声と、夕ぐれ時のほととぎすの鳴声は山から谷へ、にぎやかに展開する。また夜に入ると処々にふくろうの鳴声を聞くことができる。山道でふと、「コツコツ」という音にふりかえると、木の幹をついているキツツキの姿を見か

けたりする。

その他 川には溪流にアメノウオが棲んでいる。最近その数は減少しているが養殖に成功し、ニジマス・放流アユと共に名産として知られ、解禁日には川べりは人出でにぎわっている。イダ・ウナギ・ハヤなどは、ほとんど全域の河川にいる。奥山の溪流にはサンショウウオがすんでおり、夏にはカジカガエルの美しい声を聞くこともできる。

雑木林には夏になるとエゾゼミ・ミンミンゼミ・ヒグラシ・アブラゼミ・スズメバチ・アシナガバチ・ジガバチなどが棲息し、夜になると清流のあたりにゲンジボタルがすいすいと飛び交い、また、鈴虫・コオロギの音色を聞くことができる。

ジョログモ・オニグモ・コガネグモなどクモの種類も多く、ゲジ・トビスムカデ・アカズムカデなどが時に台所や寝室にまで侵入することがある。

家畜 牛馬が往年農耕運搬の主役を演じていたが、農業の機械化と自動車の普及によってほとんど姿を消し、農家でわずかに一、二頭の肉牛を飼育している現況で、大川嶺のカルスト台地を利用しての大規模な肉牛の放牧が計画

せられている。酪農は輸送の関係でほとんどすすんでいない。豚の飼育は輸送の関係や汚水処理の問題であまりすまず、肉牛の飼育を兼ねた専業農家が一軒あるにすぎない。

めん羊は美川の気候に適しないが、山羊は粗飼料で飼育できることと、傾斜地でも充分飼育できるので、自家用に一頭か二頭飼育している家が多く、全村で百頭程飼育している。

にわとりは多くの農家が飼育しているが、数羽から十数羽の飼育農家が多く、鶏糞と卵は自家消費が中心で、余ったのを売り出す程度で、専業は一軒で全村でも一万羽にみたない。

養蚕は本村の主産業の一つで、明治四四年、当時仕七川郵便局長であった新谷善三郎が導入して以来、現金収入のすくなかった村が活気にみち、産業振興に役立った。戦後、一時おとろえたがおんじ土壌によく桑が生育することもあり、全村的に二百軒あまりの農家が飼育しており、年産四万疋を越える繭の収穫状態がつづいている。古古味には設備のととのった稚蚕飼育所が設けられ、二齢までの

飼育と指導をおこなっている。

一、植 物

岩屋山から石鎚・大川嶺にかけては、愛媛の植物の宝庫といわれるだけに、その種類は多く、あげれば際限がない。その珍しいものに限っていえば、岩屋山のトチノキ・スギ・ヒノキ・カシの大木、その樹下に群生するイワヤシダ・イヨクジヤクなどのシダ類にトサノミツバツツジ、また、岩壁に着生するウチョウラン・セキコクなどのラン類がある。また、御三戸付近では、石灰岩にキンモウワラビ・イヌトウキ、河原にはカワラハンノキを見ることができさる。

四国カルスト県立自然公園の一部である大川嶺では、コマツツジ・ハリモミ・イブキトラノオ・ドウダンツツジなど。中津明神から赤蔵カ池にかけては、コマツツジ・オキナグサ・アカモノなどと、ヌエ退治の伝説にまつわる矢竹と赤蔵池のジュンサイがある。

美川の森林のほとんどは、スギ・ヒノキであるが、ナラ・クヌギ・クリ・ケヤキ・カシ・カエデ・ブナなどの雑

木に混ってマツがある。

農作物では、休耕田がふえ、生産量が少なくなったといえ水稲を第一にあげなければならない。その他には、大豆・小豆・トウモロコシ・ソバ・アワ・コキビ・馬鈴薯・甘藷などである。

工芸作物の茶・タバコ・桑園がふえる反面ミツマタ・ノリの減少が目立ってきた。

明神山や大川嶺の谷間に自生するワサビとササユリも珍重がられ、ウドやワラビと共に初夏の山に人々をさそっている。

第二章 人 文

第一節 産 業

美川村は地形的に海拔五〇〇以上の山地で、土地利用の状況は別表の通り九〇割が山林・原野で、農地はわずかに四・七割で、そのうち畑が三割、田が一・七割となっており、純然たる山村型である。

土地利用の状況

地 目	区 分	面 積 (ha)
農 地		638
田		231
畑		407
宅 地		146
一般住宅地		14
併用住宅地		18
農家の住宅地		102
その他の住宅地		12
山林原野		12,161
その他		557
合 計		13,502

(注) 昭和46年度

したがって産業分類別人口を見て五九・二割までが農林業に従事している。

産業分類別就業者数

産業分類別	年 次	40 年		
		総 数	男	女
農業		1,870	843	1,027
林業・狩猟業		183	153	30
漁業・水産業		2,053	996	1,057
(小) 鉱業		36	22	14
建設業		742	641	101
製造業		61	45	16
(小) 卸売業		839	708	131
金融・保険業		210	100	110
運輸業		4	3	1
電気・ガス業		92	86	6
サービス業		12	12	
公務員		211	112	99
分類不詳		60	49	11
(小) 計		2	2	
合 計		591	364	227
		3,483	2,068	1,415

(注) 国勢調査

しかしそのうち五三・七割までが農業であることからみて林業のみの従業者はごく少く、山林のほとんどは農業との兼業であることがわかる。

第二節 人 口 動 態

山村としての美川村は典型的な過疎地域といえる。合併当時九九三一人の人口が、現在ではほとんど半減の状態に

第2章 人 文

美川村の人口推移

年 度	男	女	計	世帯数	備 考
31	4,804	4,952	9,756	1,817	11月末
32	4,796	4,956	9,752	1,815	12月末
33	4,733	4,891	9,624	1,813	〃
34	4,561	4,702	9,263	1,773	〃
35	4,430	4,579	9,009	1,764	〃
36	4,242	4,435	8,677	1,738	〃
37	4,017	4,255	8,272	1,720	〃
38	3,802	3,981	7,783	1,686	〃
39	3,623	3,817	7,440	1,676	〃
40	3,504	3,679	7,183	1,655	〃
41	3,323	3,542	6,865	1,617	11月末
42	3,203	3,379	6,582	1,591	12月末
43	3,016	3,191	6,207	1,541	〃
44	2,823	3,017	5,840	1,496	〃
45	2,692	2,898	5,590	1,469	〃
46	2,562	2,783	5,345	1,440	〃
47	2,468	2,681	5,149	1,411	〃
48	2,358	2,594	4,952	1,402	〃

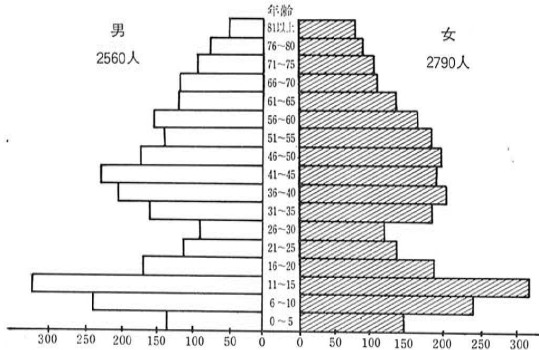
ある。また年令別人口構成を見ると、二一歳から三〇歳までの中堅労働年令層が目立って少い。これらの人々が都市部に転出していることは明らかで、昭和四六年の統計によると県内では松山に出ている者が圧倒的に多く、これに比べるとが今治・北条であり、県外では大阪・愛知・高知の順となっていて転出合計二七一名となっている。

転 入 ・ 転 出 (昭和46年)

転 入 (前住地別)		転 出 (転出地別)	
県 内	人 数	県 内	人 数
松山市	34	松山市	121
山万町	8	山治市	15
谷谷村	8	山条市	11
今伊予の	4	北条町	4
小計	2	その他	21
府県	9	(小計)	172
他市	9		
(小計)	65		
県 外	人 数	県 外	人 数
大阪府	9	大阪府	26
高知県	8	愛知県	11
東京都	6	高知県	9
奈良県	4	広島県	7
神戸市	3	東京都	6
その他	17	他市	40
(小計)	47	(小計)	99
合 計	112	合 計	271

いっぽう美川村へ転入して来た人には県内では松山市から三四名、久万町・柳谷村各八名が多く、県外では大阪から九名、高知から八名、東京から六名などで、転入合計一二二名、したがって昭和四六年の美川村の社会的人口減少一五九名となる。こうした減少傾向は表のように、こゝ数年間の傾向である。

美川村の年齢別人口構成
(昭和46年4月) 5,350人



五年間の出生率の低下を示している。一一年ないし一五年前の出生率に比して甚しく少いのは若い親たちの都市転出が、ここ四、五年間特に著しいことによるのであらうが、この少い年齢層が成人とな

年齢別人口構成 美川村の人口を年齢別・男女別に分けて見ると、だいたい社会状態や経済状態が推察できる。いっぽんに五歳ごとに階級区分をするが、これで見ると典型的な農山村型(ひょうたん型)をしている。二一歳から三〇歳までの成年層が最も少く、労働力の都市流出が考えられる。また五歳までの幼児が非常に少いのは、ここ四、

ころの美川村が案ぜられる。この人口は甚しい社会変動でもあって都市からのUターンでも行われない限り、減るとも増加することはないからである。八一歳以上の高年齢層が意外に多いのも実は日本の近年の平均寿命の高まりに符合するものである。